毎日新聞　第三種郵便物認可

ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して　14

文化

食べていくための闘い

西アフリカの農民運動

勝俣　誠

【かつまた・まこと】明治学院大教授（国際政治経済学、アフリカ地域論）、同大国際平和研究所長。1946年、東京生まれ。著書に「現代アフリカ入門」「アフリカは本当に貧しいのか」、「グローバル化と人間の安全保障」（編著）など。

「セネガルの農業は危機的な状況に追い込まれています。グローバル化の中で、アフリカそのものが『世界に開かれた市場』になっているのです」

西アフリカのセネガルで三十年にわたり、農民の生活を守るために農民団体をとりまとめてきたジョグ・ファルさんはいう。彼は西アフリカ諸国の農民団体の連合ネットワーク「ROPPA」の代表も務め、世界貿易機関（WTO）の閣僚会議には必ず、非政府団体（NGO）の立場で参加してきた。

農民の生活を守るとは、家族農業を営む農民たちが食べていけるようにする、ということである。自国政府の対外債務の返済猶予ないし削減と引き替えに、半ば強制された市場の自由化は、小規模な家族農業に大きな打撃を与えてきた。たとえば、セネガルには海外から大量の冷凍チキンが輸入されたために、二〇〇〇年からの三年間で国内の養鶏農家の七割が消えた。また、米国が国内の綿花栽培業者に莫大（ばくだい）な補助金を出し輸出価格を下げているため、西アフリカの一千万人の綿花農家は存亡の危機に瀕している。

「生命のアフリカ」とも呼ばれるこの大陸で生まれ、生きる民に、尊厳ある社会は未だ用意されていない。それどころか、アフリカはいまも、植民地期に形成された国際分業体制の中に受け身のまま組み込まれている。資源は先進国の人びとの快適な生活を満たすため「北」に向かい、この大陸には、戦乱と貧困に打ちのめされた無数の民が残される。

ファルさんと同様、西アフリカで長く農民運動の組織化に尽力してきたママデウ・シソコさんは、世界銀行などが各国に示している貧困削減策を批判する。「弱肉強食と二重基準の国際ルールの実態を無視して、不平等な南北関係から生じる貧困問題をバラバラに取り組ませるのはおかしい。いま私たちに必要なのは、生活向上のために広範な人びとを巻き込む開発戦略であり、自分たちの食べ方を自分たちで決める食糧主権なのだ」

ファルさんは「西アフリカの農民にとって大切なのは、代表民主主義以上に参加型民主主義だ」と言う。それは、農民たちが、自国の農業政策の決定プロセスと、農産物貿易の政府間交渉に、自らの声を反映させていくことである。そして、ファルさんやシソコさんのように、闘い、考え、そして闘う農民・市民が、いまやアフリカ全体で生まれつつある。

二〇〇三年九月にメキシコ・カンクンで行なわれたWTO閣僚会議は、「北」の貿易自由化交渉の進め方に異議を唱える「南」の国々の代表たちの力によって決裂した。その背景には、貿易自由化によって苦しむ途上国の農民の声、とりわけ、食べていくことさえできない状況に追い込まれてきた西アフリカの綿花栽培農民の声を代弁する社会運動の強力な働きかけがあった。

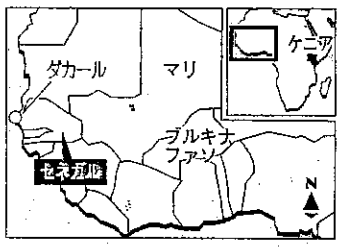
そうした運動と同時に、ファルさんたちは日々、地元の農民たちの支援活動に取り組んでいる。食品加工のための技術研修をしたり、農産物の商品化や販売の支援、商売を始めるためのマイクロクレジット（少額融資）まで、地域内で経済を立ち上げ、誰もが食べていける仕組みをつくりだそうとしているのだ。

「私たちはアフリカ地域内で共通の市場と共通の農業政策をつくろうとしています。押し付けられた政策は人びとのためにならないし、世界のどこにでもあてはまる唯一のモデルなどない。アフリカの未来は、グローバリゼーションや、いま行われている暴力的な自由化の中には決してないのです」。そう語るファルさんたちの取り組みは、農民自身が参加し、決定する権利を獲得する闘いでもある。

二〇〇四年にノーベル平和賞を受賞し、「もったいない」ということばで日本でも知られるワンガリ・マータイさんは、一九八〇年代末、ケニアの首都ナイロビで、公園が政治家によって私有化されビルが建つことになったとき、「公有地は国民のものだ」として反対し、それを阻止した。彼女たちの植林活動は、人びとが生きる環境と、女性を中心とした人権のための闘いの入り口なのだ。言い換えればそれは、人びとによる「公」と「正義」の確立の運動であり、「もったいない」という資源節約の実践にとどまらない。

自らの権利に気づき、積極的に社会と政治にコミットすることなしには、自分たちの生活は向上しない。そう考える人びとの闘いが、ゆっくりとだが確実にアフリカに広がっている。彼らの運動と、「北」の私たちとの連帯があるとすれば、それは、「あげる、もらう」という関係を越えたところにおいてであろう。

（次回は21日に掲載します）



セネガルの農民団体が、価格安定のために、自前で建設した国産タマネギ貯蔵庫（2004年12月、セネガル・チエス近郊）